

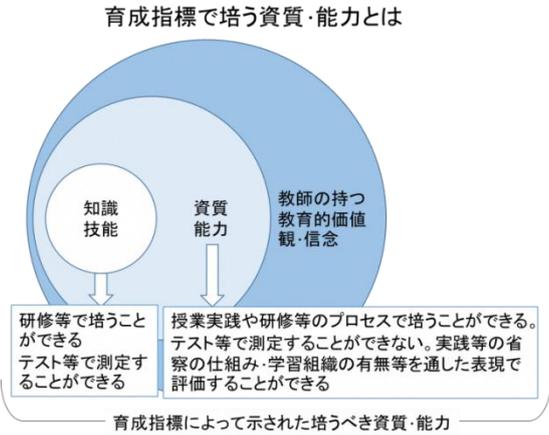
福井県教員育成指標とその活用について

1 福井県教員育成指標の基本的な考え方

- ・知識基盤社会に突入し、産業構造が大きく変化する中で、これからの社会で求められる人材像を踏まえた教育の展開や、学校現場の諸課題への対応力を図るためには、教員も向上心を持ち、学び続けることが必要である。
- ・福井県の教員には、採用の時点より教職生活全体を通じて「学び続ける人」であることを求めており、その具体的な姿は次の通りである。
 - 校種・教科等に関する専門的知識・実践的技能を持った人
 - 専門分野に偏らない幅広い教養を身につけ、自立した社会人としての良識や幅広い視野を持った人
 - 子どもたちはもとより、同僚や保護者、地域の方とも円滑な人間関係を築き、課題に対して臨機応変に対応できる人
 - 教育に対する情熱・使命感に燃え、常に学び続ける向上心を持った人

・福井県教員育成指標（以下「指標」という。）で示される、これからの教員に求められる資質・能力は、研修等で直接習得することのできる知識・技能と、直接的な教示では習得しがたい、授業や研修のプロセスの中で培われる資質・能力とから構成されている。

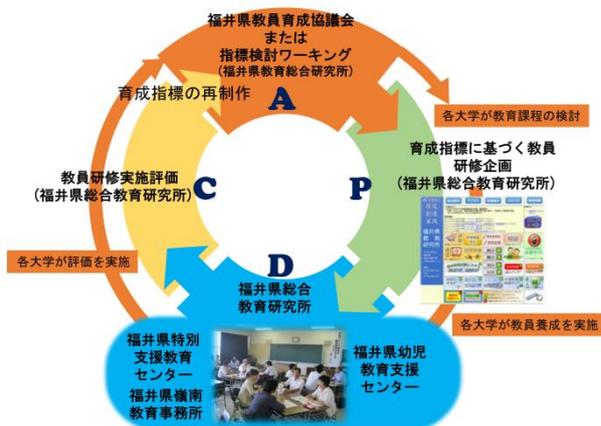
・特に、直接的に教示することでは習得しがたい資質・能力の中には、次期学習指導要領が示す「思考力・判断力・表現力」のように知識・技能の習得に関連して培われるものもあれば、「学びに向かう力」のように教員の持つ教育的な価値観や信念との関連の中で育まれるものもあり、その幅は広い。（右図参照）



・この教員の資質・能力の育成を目指すためには、最新の教育情報の提供や知識・技能の習得を目指した研修が、研修参加者の授業実践の中で咀嚼されて再構成され、その上でいくつもの実践事例の中で再確認されて資質・能力に変容していくことが必要である。そのためには、各々の研修の中で、個々の実践に基づく振り返りの機会や、研修参加者が実践と自らの教育的価値観等と突き合わせる機会を保障するとともに、研修相互の関係を明らかにした一体的な研修体系にするといった手立てが不可欠である。

- ・また、キャリアステージに応じて身に付け、発揮されるべき資質・能力がある。例えば、管理職になれば、若手を育成する能力、危機管理能力などは欠かせない能力である。しかし、このような能力は、管理職段階になって急に育成されるものではない。初任段階からの長い道のりがあって、その道りで習得された知識・技能が、絶え間ない省察を繰り返しながら、若手育成能力や危機管理能力の構成概念に意味づけられ、資質・能力として身につくものである。
- ・指標で示したキャリアステージは、採用時よりおよそ10年ごとの段階を目安として想定している。特に「福井県が求める採用時の姿」では、次期学習指導要領への対応や、大学の教職課程における教職課程コアカリキュラムの検討状況を反映して、「主体的・対話的で深い学び」、「小学校外国語」への対応や「学校インターンシップ」の実施等を想定して示した。
- ・その上で、第1ステージは、「教職の基礎を固める時期」、第2ステージは「専門性を高め、ミドルリーダーとして学校組織内の中心となって推進する時期」、第3ステージを「豊富な経験を生かし、シニアリーダーとして広い視野で組織的な運営を行う時期」として位置づけた。

2 福井県教員育成指標の活用について



・今回示した指標は、教員それぞれの適性や置かれた状況によるステージと求められる資質・能力の関係を把握するとともに、一人ひとりの教員が学校の中で他者の実践事例を傾聴し、他者の経験を自己の経験に意味づけて、自己の経験の意味を絶えず膨らませながら自らのPDCAサイクルを回すために活用するものである。

- ・学校や研修における教員の資質・能力育成のためのPDCAサイクルの成果は、絶えず育成指標の再構築に結びつかなければならない。そのために県教育総合研究所を中心に、年度ごとに指標に基づいた研修成果の検証を行うとともに、その検証に基づいて次年度の教員研修計画の作成と育成指標の見直しを組織的に行うこととする。
- ・さらに、教育委員会等が行う校外研修や大学院での授業等が、学校内の組織学習を促す「学習するコミュニティ」づくりに連結する必要がある。指標を一つの指針として、関連機関が連携して学校の教員集団を学び合う専門職集団にすることが、直接的に教示のできない教師の資質・能力を培う基盤となる。